

**こどもみらい館
企画推進会議発足
市民公募委員2名が参加**

こどもみらい館では、子育て支援の中核施設として、保育・幼児教育関係団体等との連携のもと、子育て支援の輪を地域・社会全体に広げていく取組を推進しています。
このたび、従来設置していた「企画・運営委員会」に新たに2名の市民公募委員や新規団体の方々に加わっていただいた新組織、こどもみらい館「企画推進会議」を発足しました。
年4回程度の会議を行い、子育て支援のあり方など現場に即した事業を推進してまいります。

**地域子育て支援
ボランティア養成講座
実施にむけて**

こどもみらい館では、今年度新たに、園庭開放や子育て講座などの事業をサポートし、地域ぐるみの子育て支援を一層推進するため、地域で活動する子育て支援ボランティア養成講座を開催することとしています。
今後、各園・所で活動中もしくは、今後活動が可能な方を紹介していただきたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。
なお講座は、概ね70名程度募集し10月～2月に実施する予定です。

Information (インフォメーション)

**夏の風物詩「地域教育フォーラム・イン京都」
今年は「保・幼・小・中連携」の分科会がお目見え**

京都からの発信
学校・家庭・地域「協力から協同へ、参加から参画へ」
～語ろう、創ろう、これからの日本の教育～

第7回「地域教育フォーラム・イン京都」

期 日 / 平成17年8月22日(月) 10:00～16:30(受付開始 9:30)
23日(火) 9:20～16:30(受付開始 9:00)

会 場 / 国立京都国際会館メインホール他
京都市左京区宝ヶ池〔京都市営地下鉄烏丸線「国際会館」駅(KOI)下車〕

対 象 / 保護者・市民、教職員、教育関係者

保育室あり(1歳～小学2年生)
ご希望の方は8月5日までに京都市教育委員会
地域教育専門主事室(TEL 254-5007)へ。

分科会概要 第一日目・8月22日(月)

**第6分科会《保・幼・小・中連携》
地域ぐるみの子育てリレー**

～保・幼・小・中とつながる育ちの中で～
保育士・教員等が保育所(園)・幼稚園、小学校、中学校の「段差」を理解し、子どもたちの発達等を考慮しながら、身に付けたい力や学びの連続性についての相互理解を深め、中学校区を単位とした地域全体での連携の在り方について考えます。

講演 / 無藤 隆 氏
白梅学園大学・短期大学学長
文部科学省中央教育審議会幼児教育部会・
厚生労働省社会保障審議会児童部会委員

シンポジスト
石田 公和 氏(嵯峨野保育園長)
新井 道子 氏(京都市楽只保育所長)
菅原さと子 氏(聖マリア幼稚園長)
田井三智子 氏(京都市立乾隆幼稚園長)
井丸 勝子 氏(京都市立伏見板橋小学校長)
加藤 博昭 氏(京都市立西院中学校長)

共同機構研修会のビデオを貸し出しています

園(所)内研修にご活用ください。お申込はこどもみらい館事務室まで。

- 平成16年度分
- 汐見 稔幸氏「専門職に求められる、ともに育てる保育とは」(5月17日実施分)
 - 藤森 平司氏「これからの保育園・幼稚園～21世紀型保育のススメ～」(6月11日実施分)
 - 帆足 英一氏「愛されている実感をいかに子どもに伝えるか 豊かな育ちに向けて」(9月11日実施分)
 - 西川由紀子氏「子どもの思いにこころをよせて 保護者とともに、子どもの育ちを見守る」(10月29日実施分)
- 平成17年度分
- 安家 周一氏「親が勇気をもって子育てですということ」(2月9日実施分)
 - 無藤 隆氏「遊びの中の学び～保育の今後」(5月18日実施分)

**平成16年度
共同機構研修会の講義要録ができました**

汐見稔幸氏(東京大学大学院教授)など8人の講師の講義概要と特別研修会として実施した保幼小中連携シンポジウムを収録。過去5年の研修リストや参加者アンケートに寄せられた声等も紹介しています。
2000部発行。各園・所に送付いたします。

研究冊子等の提供のお願い

こどもみらい館では、各園・所で取り組んでおられる研究などをまとめられた冊子や紀要を収集・保管し、今後の研究・研修など共同機構の取組の参考にさせていただきたいと考えています。ぜひご提供いただきますようお願いいたします。

【編】集【後】記

恵みの雨の季節となりました。先日の「こどもみらい館共同機構研修会」では、第三会場まで参加者が溢れ、学ぶことへの熱い思いを感じました。
「学ぶ」ということは、「真似る」ことから始まるといわれています。
子どもたちは、日々大人のすることを真似て育っていることに、謙虚さと誇りをもっていきたいものです。

研究・研修部会委員 黒崎徳江(京都市保健福祉局保育課担当課長)

発行日 平成17年7月1日
発行者 京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る
Tel (075)254-5001
Fax (075)212-9909
Eメール jigyo@kodonomirai.or.jp
URL http://www.kodonomirai.or.jp

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館
研究・研修だより

かがやき Vol.4

開館5周年記念事業

「がんばる子育て みんながメダリスト」を開催

こどもみらい館では開館5周年を記念した事業「がんばる子育て みんながメダリスト」を3月25日に開催し、200名近くの市民の皆さんが参加されました。

第1部では、保護者や保育士・教員等から広くご応募いただいた「子育てわくわく 安心のまち京都」創出に向けた論文・提言に入賞・入選された方々の表彰式を行い、第2部では、アテネオリンピック陸

上選手団団長を務められた朝原宣治さん、みらい館建設構想策定委員で、バルセロナオリンピックのシンクロ競技で銅メダルに輝いた奥野史子さんご夫妻による「五輪カップル さわやかトーク」を開催。育児にまつわるエピソードやアスリートの子育て観などをお話しいただきました。



朝原・奥野夫妻のトーク(聞き手 浅野館長)



市長賞の長田さん(贈呈 門川教育長)



市長賞・館長賞・入選のみなさん

市長賞
「子どもと一緒に歩くことから始める
自然や環境からの学び」 長田 裕子様

こどもみらい館館長賞
「育児日記～
リズムよく子育て・育児日記より伝えられる愛情～」
矢島 尚代様

入選(佳作)
「子どもの為の住空間」 安藤 慶彦様
「自然環境を保育に取り入れることの意義についての一考察 -
「ほしファーム(元明倫幼稚園)での活動を通して-」
奥 景子様

「0～3歳の育児不安を支える助産師の育児支援」
神原 祐美様

「発達障害の子に恵まれ学んだ事」澤井多江子様

「みんなでひとつながりに連なった子育て支援を」
朱 まり子様

「地域に根ざした子育て支援
- 地域の子もたちとの交流活動を通して -」
田中 菜生様



記念トークと論文・提言の概要をまとめた冊子を7月中旬に発行いたします。御希望の方はこどもみらい館(TEL254-5001)までお申し出ください。

保護者ととともに歩む子育て支援

～みらい館の相談現場から親の悩みを考える～

講師・山尾 由紀氏

こどもみらい館カウンセラー

プロフィール/臨床心理士。平成11年12月のこどもみらい館開館当初からカウンセラーとして、乳幼児と保護者の相談を担当。

保護者の気持ちを理解するには

一般的に、人はあいまいな状況におかれると、何とか意味をつけ、理解しようとしませんが、それができない時には誰でも不安になってしまいます。

子育ても、成果が見えにくく、計画どおりにもいかない、正解もない、また、個人差が大きいというあいまいな状況が続くので、保護者は不安になりがちです。子育てには悩みがつきものですが、悩みをもつことがいけないのではなく、その不安に圧倒され、心が動かなくなることが問題だととらえています。心が動かなくなると、子どもの要求に応えられないだけでなく、感情豊かに応答できなくなるからです。悩みは取り除いてあげるのが良いのではなく、親に悩む力をつけてもらいながら、子どもにかかわってもらうことが大切になってきています。

育児不安の要因はいろいろありますが、今までの価値観の変更を迫られることによる育児不安は、親にとってとてもしんどいことのひとつと言えます。親になる前には、学生や社会人として能率よく勉強や仕事をこなすと評価されてきた人も、親になると、育児というあいまいな状況の中では成果や評価が目に見えず、しんどくなるのです。

保護者から相談を受けるとき

子育ての中で、何か問題が生じたとき、原因はひとつだけではないことも多く、また、その原因を全て取り除けば解決できるというものでもないでしょう。保護者の不安な気持ちに共感しながら、この危機が成長に変わる好機としてとらえるといいのではないのでしょうか。

保護者からの相談を受けたときは、自分の対応の仕方を周りの人に聞くことも大切です。自分の感性が思い込みや

勘違い、一人相撲にならないために、悩みや問題を一人で抱え込まないことが大切でしょう。主観に走らないために、臨床心理士などの専門家をうまく利用するのも一つの方法です。

当相談室の特徴

当相談室は、就学前の乳幼児とその保護者を対象にした相談室です。館内には子育て図書館やこども元気ランドなどもあって全市的に人が来やすい所になっています。また、1回のアドバイスだけでなく、継続的な相談を行っていること、紹介者なしの自主来談者が多いことなども特徴的です。

子育て相談の延べ面接回数は平成15年度で約2000回で、年齢別の受理事件数は、2歳児の保護者の相談が一番多くあります。これは1歳半健診と3歳3ヶ月健診との間で、相談に行く所が身近にないためではないかと思われます。

子育ての具体的な方法をたずねてくる相談は0歳、言語の遅れや自閉傾向など発達に関する相談は2、3歳に多く、社会生活への適応に関する相談は3歳ぐらいから増えてきます。子どもの年齢に応じた問題が持ち込まれていると言えます。保護者が子育てでうまくいかないことを初めて体験されたとき、他者の援助をうまく取り入れられると、孤立した育児が少し避けられます。この時にうまく手助けができることが大切だと思っています。

育児不安の相談

子どもが生まれてすぐからの育児不安の要因としては、「夫が多忙、実家が遠方等で、精神的に頼るところがない」「赤ちゃんは予定どおり行動しないから、自分の時間が持てない」

「泣かれるとどうしたらいいかわからない」「望まない出産、望まない性」「産褥期のうつ的な状態」などが考えられると思います。1歳過ぎ、子どもが動き出しからの育児不安の要因としては、「子どもが反抗しだしてから可愛くなくなる」「保護者仲間に入りにくい」「他児と成長の度合いを比較して不安になる」などが考えられます。

親自身はじめて親になってまだ未熟なところもあるでしょうが、それを非難せずに不安な気持ちを聴くことが大切です。話し相手がいない親も多いので、ゆっくり関心をもって聴いていくだけでも孤立感が薄れます。具体的な育児の方法やサポートの情報を渡すことも有効です。

集団不適応の相談

4～6歳の子どもの相談として多いのが「集団不適応」の相談ですが、その中で、難しいのは、園での子どもの様子を保護者の方には理解してもらいにくい場合です。例えば、保護者の前では問題行動を見せない場合、園での様子が保護者にはわかりません。保護者は問題を感じておられないので、園からの紹介でも相談室につながり難いです。保護者が納得されるには、時間がかかりますが、安定した信頼関係を築くことを大切にしています。

参考

相談事業—幼児教育・保育の専門家や臨床心理士、医師による対応—

乳幼児の子育てについてあらゆる相談に応じるとともに、医学的視点も踏まえ、それぞれの子どもや家庭の抱える課題の早期解決に向けた支援を行っている。
子育てに不安や悩みを持つ保護者等がいつでも気軽に相談できるよう、電話相談はもとより特に臨床心理士によるカウンセリングや医師会等の協力を得た健康相談など充実した体制を整えている。

()内：1日又は1回当たり平均件数

	13年度	14年度	15年度
対面相談	1,427件(4.7)	1,867件(6.1)	2,075件(6.8)
健康相談	90回183件(2.0)	89回193件(2.2)	83回190件(2.3)
電話相談	1,095件(3.6)	1,041件(3.4)	1,030件(3.5)

- (1) 来館の相談(予約制)
- ア. 対面相談
- ・ 15年度新規受件数：123件(前年度100件)
 - ・ 新規の主な相談内容
- ①「性格行動に関する相談(攻撃的な行動・吃音・落ち着きがない・夜尿等)」：43件
 - ②「発達に関する相談(言葉の遅れ、自閉傾向)」：41件
 - ③「社会適応に関する相談(集団に入れない・不登園・しつけ等)」：12件
- イ. 健康相談
- ・ 相談内容：虫歯について、アトピー、喘息、チック、ことばについて、斜視、発育の遅れ、予防接種など
- (2) 電話相談
- ・ 子どもに関する相談：約60%、大人自身の相談：約40%
 - ・ 子どもに関する相談
 - ・ 離乳食・偏食、おむつはずし、しつけ、幼稚園・保育所での生活など
 - ・ 大人自身の相談
 - ・ 育児不安・いらいら、家族・近隣の対人関係など
 - ・ 電話相談ボランティア63人が登録・活動
- (3) 館内の遊び場と交流の場「こども元気ランド」での相談
- ・ 元気ランド担当の子育て支援ボランティア(135人が登録・活動)と相談員が遊びを通じて親子と自然な形で触れ合う中で、相談に応じたり子育ての楽しさを伝える場

【平成17年1月26日】



親が勇気をもって 子育てするということ

講師・安家 周一 氏

あけぼの幼稚園園長



プロフィール / 学校法人あけぼの学園理事長、あけぼの幼稚園園長。(社)大阪府私立幼稚園連盟理事長を務めるほか、全日本私立幼稚園連合会の常任理事・教育研究委員長・自己点検評価プロジェクト委員にも就任。同園では、キンダーカウンセラーを配置するなど先進的な活動を続ける。
主な著書に「指導計画の記入事例集 3・4・5歳児」・「保育に役立つ書式便利帳」(黎明書房)、「一人ひとり育てる」(ひかりのくに)ほか多数。

まで預けられる保育所が増えたらどうなると思いますか。お母さんたちに皺が寄るんです。結果的に、女性の長時間労働が増えるだけです。

男の働き方は変わっていない。特に30代のお父さん方には、ウィークデーは、子どもの顔を見られないという人が沢山います。それは、ある意味、非人間的です。その人たちの父親は、今、60代、70代だと思いますが、高度成長期に企業戦士と呼ばれた人たちで、余り家にはいなかった。つまり、今のお父さん方は父親のイメージを持たずに父親になって、企業戦士として夜中まで働いて、土日に子どもと接するだけとなってしまったのです。

子どもを柔らかい布団に

そういう「父親のモデルを持たない父親たち」が家庭で子育てをし、赤ちゃんを抱いたことのない親が子育てをしている。母親だけで子どもを育てなければならない時代というのは、日本の有史以来初めてなんですね。

しかも、若い世代は、そんなに広い家には住めない。狭い白壁の2DK。そこで、耳をつんざくような声で子どもが泣くんですよ。慈しみ深いお母さんでさえこう言われました。「子どもと二人きりでいたらね、子どもを柔らかい布団に投げつけたくなるんです...硬いところには、よう投げんけど。柔らかいところになら」って。それくらい大変なことなのに、世の中には余り知られていない。虐待した親だけが悪者として扱われている。もちろん虐待がよいわけがないが、そうならざるを得ない状況があるという現実、誰が、どう気づくかということだと思えます。

この頃の親は

この頃の親御さんは、テレビゲーム第1世代、マニュアル世代です。マニュアルがないと不安なんですね。子育ての本もお持ちです。しかし、そこに書かれている標準と自分の子の状況がうまくマッチしないことに慌ててしまう親が少なくありません。保育士経験のある母親でさえ、わが

子のことに関しては同じようです。

また、人間関係を作ることがヘタですね。高度経済成長期に団地住まいが増え、ご近所に迷惑をかけないように家庭で教えられ、育てられた。しかし、社会は、気持ちのよい迷惑の掛け合いの連続じゃないですか。「お互い様」と言いながら、生活し合うというのが人間社会の構造です。それが共同体ですよ。コンビニが発達し、米や醤油の貸し借りという関係がなくなって、迷惑をかけないで生きていける社会構造ができてしまったんですね。

そのため、迷惑をかけるのにすごく臆病なんですね。でも、子育ては、迷惑のかけどおし。周りに迷惑をかけながらでないと、本来できないものでしょう。迷惑をかけたり頼るのが上手な人は、楽々、子育てできますね。でも「人に迷惑かけたらあかん、自分でごんばらな」と考えている人は、ものすごいプレッシャーの中で子どもを育てざるを得ない環境になってしまっているんです。

ゆっくりとした子育てを

「ドッグイヤー」...人間の1年が犬の5年だといわれます。私は、0歳から3歳ぐらいをドッグイヤーだと思えます。年をとると1年が早く感じられますが、子どもは1年をゆっくりと生きています。0~3歳の1年は5年に、3~9歳の1年は4年に、そして9~16歳の1年は3年に相当すると考えると、合計で60年となります。そこで子ども時代は終わり、今度は大人に生まれ変わって大人時代を60歳まで生き、また子どもに戻っていく。この3つのパターンで人は生きると思っています。従って、16歳までの「ゆっくりさ」を親とともにどうやって守ってやれるか、それが、とても大事ではないでしょうか。

しかし、親の状況は多様です。例えば、両親共働きで母は管理職、子どもは3歳で私立幼稚園と認可外保育所での二重保育。残業の日は夜9時頃まで認可外保育所に預かってもらうそうです。どこで子どもとの時間をつくり、何時間かわかれるのか。仕事の時間に子どもをあわせないと、仕事が続けられないというのが現実です。このような生活で子育てが楽しいと感じられるでしょうか。このようなワーキングマザーの姿を見て、未婚の女性が働いて子どもを産みたいと思うのでしょうか。「私にはできない」と考えはしないでしょうか。競争社会や男の働き方を変えないと、少子化はますます進むと思います。

子どもの育ち

前々から、5歳児就学の問題があります。年長の5歳児は、字も書ける、体も大きい、小学校でいいのではないかという声があるんです。私は、5歳児が幼稚園に必要なと考えています。その理屈を捜し求めていたときに、ミルンの「六つになった」という詩に出会いました。「一つのときは、なにもかもはじめてだった。

二つのときは、ぼくはまるつきりしんまいだった。
三つのとき、ぼくはやっとぼくになった。
四つのとき、ぼくはおおきくなりたかった。
五つのときには、なにからななまでおもしろかった。
今は六つで、ぼくはありったけおこりこうです。
だから、いつまでも六つでいたいとぼくは思います。

(A・A・ミルン作、周郷 博訳)
これなんですよ。育ちにずーっと課題とテーマがあって、一つ一つクリアーして、「ありったけお利口になった」という段階で小学校に行かないと。

三つで自我を発見し、他の子どもたちの存在が見えてくる。四つのとき、自分が弱い存在であることに気づく。年長の5歳児を見て「すごいなあ」と思い、自分は小さいと気がつくわけです。だからどうしても保育所、幼稚園には、モデルとなる5歳児がいないと困るのです。5歳児は思いどおりに体を動かさず、何から何までおもしろい。6歳でお利口さんになった段階で小学校に行く。すると45分の授業でも、興味さえ引いてあげれば、難なくこなすんですよ。しかし、現状はそうならない。小学校教育が変わりきっていないことも原因かもしれませんが、就学前の保育や教育が、家庭内の問題も含めて子どもの育ちが、ミルンの詩のようになっていない。これは、我々の責任だと感じていますが、何とかできると思います。

親をエンパワーメントすること

私たちの園では「森と歩こう」という子どもに自然体験をさせるプログラムがあります。池田小学校事件の後、保護者からプログラムに同行する職員を増やしてほしいという要望が寄せられ、人手がなく実施を見合わせざるを得ないことを説明しました。すると、保護者から自分たちが同行しても良いかと問われ、ボランティアとして保護者が手伝ってくれることになりました。今、読み聞かせや給食の洗いなども保護者が協力してくれています。

園は異業種交流の場でもあります。親を勇気づけ元気づけるポイントは、私たち職員が助手席の立場になりきり、親の運転を見守ってサポートすることです。親をお客さんにするのではなく、親自身が自分たちで何かをやる気にさせることです。コーチングが、私たちの大きな役割だろうと思っています。 【平成17年2月9日】



遊びの中の学び 保育の今後

講師・無藤 隆氏

白梅学園大学・短期大学学長



プロフィール/白梅学園大学・短期大学学長。専門は発達心理学。特に、生涯発達心理学に基づいた保育・教育の実践研究を行っている。文部科学省中央教育審議会幼児教育部会委員、厚生労働省社会保障審議会児童部会委員等を歴任。日本発達心理学会理事長、日本保育学会理事も務める。主な著書に、「幼児の知的好奇心を育てる 学びの3つのモード論」「赤ん坊から見た世界」「早期教育を考える」ほか多数。

が公表されると、親が選ぶ資料にもなります。ただし、サービスなどの数字の評価だけで保育を評価されると困ります。地域や親の事情によって保育は変わるものであり、保育の中身を実際に見て、正しく評価されるべきです。

学びの芽生えを育てる

保育所・幼稚園の保育は、小学校のためにあるわけではありませんが、小学校教育の基盤となるべきです。子どもを育てることは、子どもの今を大切にすることと同時に、将来に向けて育つようにかかわることと言えます。

保育では一つの活動の中にいろいろな学びの要素が含まれています。その学びは、小学校の生活科や音楽、図画工作とのつながりは理解しやすいですが、他の教科の内容にもつながっているのです。例えば、積木遊びでは、巧緻性を養う面、友だちとみたとて遊ぶことで人間関係が育つ面、また、図形概念を育てるといった面もあります。一つの遊びの中で多くを学ぶ、一石三鳥、四鳥のようなことを保育ではたくさんしているのです。

普段の遊びの至るところに多くの学びの芽生えがあることを、保育者が意識し、受け止め、その育ちを確かなものにしていくことが大切です。学びの芽を育てるには、保育に小学校の低学年の活動を取り入れるということではなく、今している遊びを大切に、その中で子どもが何を学んでいるのかをよく見て、小学校へつなげられるものは何かを考えていくことが必要です。

協同的な学びを可能にする

協同的な学びは、子どもたちがグループで互いに協力して、時間をかけ、自分たちの目標に向かい、工夫しながら建設的に遊びに取り組むことで可能になります。これをプロジェクト学習と呼ぶこともあります。

例えば、幼稚園のお祭りのときにクラスでおばけ屋敷を作ろうとか、「大きなかぶ」の話の聞いたので紙芝居を作

って見せようとかいうものです。保育者が導入や指導もしますが、子どもたちがやりたいと思ってやってみるもので、目標に向かって皆で協力することが大事です。子どもたちは、ぶつかり合ったり、行き詰まったりすることもあります。工夫して根気強く取り組みます。そのためには、計画を立て、振り返り、次の構想を立てることも必要です。

そして、そのような活動を、5歳児の年長組の時に実現するためには、それまでの育ちが必要なので、3歳児でやりたいことをさせるとか、4歳児では2人くらいで取り組むことができるか、それぞれの時期の保育のカリキュラムに何が必要かを具体的に考えなくてはなりません。

協同的な遊びは、学校の授業そのものではありませんが、一定の時間は興味を持続させ、一つのことを根気強く工夫し取り組まなくてはなりません。その中で、小学校に向けた学習の態度、やり方を身に付けていくのです。

小1プロブレムと言われていることの要因には、多くの面があると思いますが、子どもが根気強く取り組めないという面もあります。しかし、授業中おとなしく我慢して座ってられる子どもを育てるということではなく、集中してやりたいことに取り組める子どもを育てることを保育は目指さなければなりません。子どもが自分たちの力で遊びを見つけて取り組めるように育てなければなりません。テレビや遊園地のように与えられたもので楽しむのではなく、砂場のように何も無いところから遊びを自分たちで作る活動の中におもしろさを発見できる力、作り出していく力を身に付けることこそが、最も大事な意味で小学校教育の基盤となります。

道徳性の芽生えを育てる

道徳性の芽生えは、広い意味で、子どもの自己の育ち、人間関係の育ちと考えていただければよいと思います。

道徳性の芽生えを育てることは、「自分を大切に、相手を大切に、みんなを大切に、社会を大切にする」という気持ちを育てることです。おもちゃの取り合いの場合を考えると、「自分」を大切にすればよい。「相手」を大切にすればよい。しかし、どちらか一方では困るわけで、両方が大切に生かせる方法を考えなければなりません。また、「自分と相手」の二人だけがよければよいということではなく、クラス全体、園全体の「みんな」という視野を持てるようにしていく。そして、幼児のレベルを超えるかもしれないけれども、社会のルールも知って守っていく態度を育てることも大切です。そして、それぞれをどう両立させていくかということが重要で、ルールを守りながら自分たちも楽しくないといけないのです。

活動をとらえる

子どもが何を学んでいるかを理解して保育を良くしていくためには、日々の記録と園内での話し合いが大切です。子どもの活動をとらえるために保育を記録する方法は、いくつも活動記録を積み上げて比べ、一人ひとりの子どもがどう育ってきたか、変容の様子を見ていくことが最も基本的なことです。記録のポイント、子どもが30分とか1時間に経験したことをよく見て、何をしたか、何を得たか、何を感じたかを検討することや、長い時間での変容をいくつかの事例を並べて検討することが基本的なものでしょう。

また、保育者の指導のあり方の記録へのとどめ方については、自分自身では指導の姿を見直すことは難しいので、他の保育者に見てもらったり、ビデオで撮って見直したり、外部から指導者に来てもらって園内研修を行ったりしていただきたいと思います。

保育者の専門性を高める

保育者は、保育の長時間化、障害のある子どもへの対応、子育て相談の難しい事例など、厳しい状況にありますが、そうした中で、より専門性を高めるためには、園内や園外での研修の充実を図ることが最も大切です。

ぜひともカウンセリングやソーシャルワークなどの勉強、4年制大学や大学院での勉強など、自らの専門性を高める意識を持っていただきたいと思います。

【平成17年5月18日】

